

平成23年12月22日

参考資料…Clarity版ISA、報告書、及び主な現行の監査実務指針の比較表

注1：本表は、監査基準委員会の新起草方針に基づく改訂版をご理解頂く際に参考に資するために、便宜的に作成した参考資料であって、報告書の一部を構成するものではなく、また、正式な手続を経て取りまとめたものでもない旨ご留意ください。

注2：主な現行の監査実務指針については、Clarity版ISAに概ね相当するテーマを扱う監査実務指針を選定し、さらに概ね対応する項目のみを抽出しております。したがって、欄が空白であることをもって、ただちに我が国の現行の監査実務指針に規定が存在しないことを意味する訳ではなく、他の監査実務指針に記載がある場合もある旨ご留意ください。

注3：Clarity版ISAに付されている脚注や他の基準への参照は基本的に報告書では含めていない点にご留意ください。

注4：「主な現行の監査実務指針」の列で現行の監査実務指針の項が重複する場合には、最初に登場する項目又は主たる項目のみに当該項の文書を記載し、2回目以降に登場するときにはカッコを付して「（現行〇項。なお、該当文章は報告書の〇項の右列）」と記載するにしております。

| Clarity版ISA [Requirement etc] | [Application etc] | 報告書 [要求事項等] | [適用指針] | 主な現行の監査実務指針 |
|--|---|---|---|---|
| ISA 520, “Analytical Procedures” | | 監査基準委員会報告書 520 分析的手続 | 平成 23 年 12 月 22 日 日本公認会計士協会 監査基準委員会 (報告書：第 55 号) | 監査基準委員会報告書第 1 号 分析的手続 平成 4 年 10 月 1 日 改正 平成 13 年 1 月 17 日 最終改正 平成 14 年 9 月 3 日 |
| Introduction | Application and Other Explanatory Material | 《Ⅰ 本報告書の範囲及び目的》 | 《Ⅲ 適用指針》 | |
| Scope of this ISA | | 《Ⅰ. 本報告書の範囲》 | | 本報告書の目的 |
| 1. This International Standard on Auditing (ISA) deals with the auditor’s use of analytical procedures as substantive procedures (“substantive analytical procedures”). It also deals with the auditor’s responsibility to perform analytical procedures near the end of the audit that assist the auditor when forming an overall conclusion on the financial statements. ISA 315 ¹ deals with the use of analytical procedures as risk assessment procedures. ISA 330 includes requirements and guidance regarding the nature, timing and extent of audit procedures in response to assessed risks; these audit procedures may include substantive analytical procedures. ¹ ISA 315, “Identifying and Assessing the Risks of Material Misstatement through Understanding the Entity and Its Environment,” paragraphs 6(b). ² ISA 330, “The Auditor’s Responses to Assessed Risks,” paragraphs 6 and 18. | | 1. 本報告書は、監査人による実証手続としての分析的手続（以下「分析の実証手続」という。）の利用に関する実務上の指針を提供するものである。本報告書はまた、監査人が財務諸表に関する全般的な結論を形成する際に役立つ、監査の最終段階の分析的手続の実施に関する実務上の指針も提供する。監査基準委員会報告書 315「企業及び企業環境の理解を通じた重要な虚偽表示リスクの識別と評価」はリスク評価手続としての分析的手続の利用に関する実務上の指針を提供する（監基報 315 第 5 項 (2) 参照）。監査基準委員会報告書 330「評価したリスクに対応する監査人の手続」は、評価したリスクに対応する監査手続の種類、時期及び範囲に関する要求事項及び指針を記載している。これらの監査手続は分析の実証手続を含むことがある（監基報 330 第 5 項及び第 17 項参照）。 | | 1. 本報告書は、分析的手続の意義を明らかにし、その適用に関する実務上の指針を提供するものである。 |
| Objectives | | 《Ⅲ. 本報告書の目的》 | | 目的 |
| 3. The objectives of the auditor are: (a) To obtain relevant and reliable audit evidence when using substantive analytical procedures; and (b) To design and perform analytical procedures near the end of the audit that assist the auditor when forming an overall conclusion as to whether the financial statements are consistent with the auditor’s understanding of the entity. | | 2. 本報告書における監査人の目的は、以下を行うことである。 (1) 分析の実証手続を利用する場合に、適合性と証明力のある監査証拠を入手すること (2) 監査の最終段階において、企業に関する監査人の理解と財務諸表が整合しているかどうかについて、全般的な結論を形成するために実施する分析の手続を立案し実施すること | | 5. 分析的手続は、次の目的のために用いられる。 (1) 監査計画の策定に際し、適用すべき監査手続、実施の時期及び範囲の決定に役立たせること (2) 実証手続の実施に当たり、勘定や取引に係る監査要点に適合する監査証拠を入手すること (3) 監査の最終段階で財務諸表を総括的に吟味すること 監査人は、監査計画の策定及び財務諸表の総括的吟味において、必ず分析的手続を実施しなければならない。また、実証手続としての分析的手続は、発見リスクの程度に基づいて、それ以外の実証手続よりも効果的又は効率的な場合に実施する。 監査人は、分析的手続を実施する目的に適合するよう、自らの判断に基づいて、その手法、実施対象、利用するデータ及び実施時期を決定する。 |
| Definition | | 《Ⅳ. 定義》 | 《Ⅰ. 分析的手続の定義》（第 3 項参照） | 定義 |

| Clarity 版 ISA [Requirement etc] | [Application etc] | 報告書 [要求事項等] | [適用指針] | 主な現行の監査実務指針 | | |
|--|---|--|---|---|--|---|
| 4. For the purposes of the ISAs, the term “analytical procedures” means evaluations of financial information through analysis of plausible relationships among both financial and non-financial data. Analytical procedures also encompass such investigation as is necessary of identified fluctuations or relationships that are inconsistent with other relevant information or that differ from expected values by a significant amount. (Ref: Para. A1-A3) | A1. Analytical procedures include the consideration of comparisons of the entity’s financial information with, for example: <ul style="list-style-type: none"> • Comparable information for prior periods. • Anticipated results of the entity, such as budgets or forecasts, or expectations of the auditor, such as an estimation of depreciation. • Similar industry information, such as a comparison of the entity’s ratio of sales to accounts receivable with industry averages or with other entities of comparable size in the same industry. | 3. 本報告書における用語の定義は、以下のとおりとする。 「分析的手続」－財務データ相互間又は財務データと非財務データとの間に存在すると推定される関係を分析・検討することによって、財務情報を評価することをいう。分析的手続には、他の関連情報と矛盾する、又は監査人の推定値と大きく乖離する変動や関係の必要な調査も含まれる。(A1 項から A3 項参照) | A1. 分析的手続は、企業の財務情報と、例えば、以下の情報との比較についての検討を含む。 <ul style="list-style-type: none"> • 比較可能な過年度情報 • 予算や見込みなどの企業の業績予想、又は減価償却の見積りなどの監査人の推定 • 業界情報（例えば、企業の売掛金回転率についての業界平均、又は同程度の規模の同業他社との比較） | 2. 分析的手続とは、財務データ相互間又は財務データ以外のデータと財務データとの間に存在する関係を利用して推定値を算出し、推定値と財務情報を比較することによって財務情報を検討する監査手続である。推定値には、金額のほか、比率、傾向等が含まれる。 | | |
| | A2. Analytical procedures also include consideration of relationships, for example: <ul style="list-style-type: none"> • Among elements of financial information that would be expected to conform to a predictable pattern based on the entity’s experience, such as gross margin percentages. • Between financial information and relevant non-financial information, such as payroll costs to number of employees. | | A2. 分析的手続は、例えば、以下の関係についての検討も含む。 <ul style="list-style-type: none"> • 企業の実績が示すパターンに基づいて一定の推定が可能な財務情報の構成要素間の関係（例えば、売上総利益率） • 財務情報と関連する非財務情報との間の関係（例えば、給与と従業員数） | | 8. 分析的手続において利用するデータの情報の例としては、次のものが挙げられる。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 企業の財務情報 (2) 企業の財務情報と密接な関係にある財務情報以外の情報（例えば、従業員数、労働時間、販売数量等） (3) 業界又は同業他社の情報 (4) 企業が作成する予算又は予測情報 (5) 為替相場、平均株価、経済統計等の情報 | |
| | A3. Various methods may be used to perform analytical procedures. These methods range from performing simple comparisons to performing complex analyses using advanced statistical techniques. Analytical procedures may be applied to consolidated financial statements, components and individual elements of information. | | A3. 多様な手法が分析的手続を実施するために利用される。これらの手法は、単純な比較の実施から高度な統計的手法を用いた複雑な分析の実施まで多岐にわたる。分析的手続は、連結財務諸表、構成単位及び情報の個々の構成要素に適用される。 | | | |
| Requirements | | 《Ⅱ 要求事項》 | | | | |
| Substantive Analytical Procedures | Substantive Analytical Procedures (Ref: Para. 5) | 《Ⅰ 分析の実証手続》 | 《Ⅱ 分析の実証手続》（第4項参照） | 実証手続としての分析的手続 | | |
| 5. When designing and performing substantive analytical procedures, either alone or in combination with tests of details, as substantive procedures in accordance with ISA 330 ³ the auditor shall: (Ref: Para. A4-A5) <ol style="list-style-type: none"> Determine the suitability of particular substantive analytical procedures for given assertions, taking account of the assessed risks of material misstatement and tests of details, if any, for these assertions; (Ref: Para. A6-A11) Evaluate the reliability of data from which the auditor’s expectation of recorded amounts or ratios is developed, taking account of source, comparability, and nature and relevance of information available, and controls over preparation; (Ref: Para. A12-A14) Develop an expectation of recorded amounts or ratios and evaluate whether the expectation is sufficiently precise to identify a misstatement that, individually or when aggregated with other misstatements, may cause the financial statements to be materially misstated; and (Ref: Para. A15) Determine the amount of any difference of recorded amounts from expected values that is acceptable without further investigation as required by paragraph 7. (Ref: Para. A16) <p>³ ISA 330, paragraph 18.</p> | A4. The auditor’s substantive procedures at the assertion level may be tests of details, substantive analytical procedures, or a combination of both. The decision about which audit procedures to perform, including whether to use substantive analytical procedures, is based on the auditor’s judgment about the expected effectiveness and efficiency of the available audit procedures to reduce audit risk at the assertion level to an acceptably low level. | 4. 監査基準委員会報告書 330 に従った実証手続として、単独で又は詳細テストとの組合せにより、分析の実証手続を立案し実施する場合に、監査人は以下を行わなければならない（監基報 330 第 17 項参照）。(A4 項から A5 項参照) <ol style="list-style-type: none"> 特定のアサーションに関して評価した重要な虚偽表示リスクと対応する詳細テスト（該当する場合）を考慮に入れ、これらのアサーションに対して特定の分析の実証手続が適切かどうかを判断すること（A6 項から A10 項参照） 利用可能な情報の情報源、比較可能性及び性質と目的適合性並びに作成に係る内部統制を考慮に入れて、計上された金額又は比率に対する監査人の推定に使用するデータの信頼性を評価すること（A11 項から A13 項参照） 計上された金額又は比率に関する推定を行い、当該推定が、個別に又は集計して重要な虚偽表示となる可能性のある虚偽表示を識別するために十分な精度であるかどうかを評価すること（A14 項参照） 計上された金額と監査人の推定値との差異に対して、第6項により要求されるような追加的な調査を行わなくても監査上許容できる差異の金額を決定すること（A15 項参照） | A4. アサーション・レベルでの監査人の実証手続は、詳細テスト、分析の実証手続又はその両方の組合せである。分析の実証手続の利用を含め、実施する監査手続は、アサーション・レベルの監査リスクを許容可能な低い水準に抑えるために、利用可能な監査手続の有効性及び効率性についての監査人の判断に基づいて決定される。 | 11. 監査人は、実証手続として分析的手続を適用する場合、監査実施の効果と効率を勘案して、分析的手続のみを実施するか、又は分析的手続をそれ以外の実証手続との組合せによって実施するかを選択する。なお、発見リスクの程度を高くしてもよい場合は、分析的手続のみを実施することができるが、発見リスクの程度を低く抑えることが必要な場合は、分析的手続以外の実証手続を十分に実施しなければならない。 分析的手続の実施によって入手する監査証拠は、監査要点に対して監査人が必要とする証明力を有する場合もあれば、必要とする証明力を有さない場合もあることに留意しなければならない。 | | |
| | A5. The auditor may inquire of management as to the availability and reliability of information needed to apply substantive analytical procedures, and the results of any such analytical procedures performed by the entity. It may be effective to use analytical data prepared by management, provided the auditor is satisfied that such data is properly prepared. | | A5. 監査人は、分析の実証手続を実施するために必要な情報の利用可能性及び信頼性並びに企業が実施した分析的手続の結果に関して、経営者に質問することがある。監査人は、経営者が実施した分析的手続の結果及び利用したデータが適切であるという心証を得た場合、当該分析結果及びデータを利用することが効果的なことがある。 | | | 12. 実証手続として分析的手続を適用するに当たっては、次の点を考慮する。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 監査要点との適合性 (2) データ間に存在する関係の合理性及び推測可能性 (3) 推定値の算出に利用するデータの入手の容易性及び信頼性 (4) 推定値の精度 |
| | <i>Suitability of Particular Analytical Procedures for Given Assertions</i> (Ref: Para. 5(a)) | | 《(1) アサーションに対する特定の分析的手続の適切性》（第4項(1)参照） | | | |
| A6. Substantive analytical procedures are generally more applicable to large volumes of transactions that tend to be predictable over time. The application of planned analytical procedures is based on the expectation that relationships among data exist and continue in the absence of known | A6. 一般的に、取引量が多く予測可能な取引に対して、分析の実証手続はより適合している。計画した分析的手続は、反証がない限り、データ間の関係が存在し継続するという推定に基づいて実施される。しかしながら、 | | 3. 分析的手続の有効性は、データ間に存在する関係に影響を与える異常な状況がなければ、当該関係が存続するであろうということを前提として成り立つ。異常な状況の例としては、事業内容の変化、異常な取引又は事象 | | | |

| Clarity 版 ISA [Requirement etc] | [Application etc] | 報告書 [要求事項等] | [適用指針] | 主な現行の監査実務指針 |
|---------------------------------|---|-------------|---|----------------------------------|
| | <p>conditions to the contrary. However, the suitability of a particular analytical procedure will depend upon the auditor's assessment of how effective it will be in detecting a misstatement that, individually or when aggregated with other misstatements, may cause the financial statements to be materially misstated.</p> <p>A7. In some cases, even an unsophisticated predictive model may be effective as an analytical procedure. For example, where an entity has a known number of employees at fixed rates of pay throughout the period, it may be possible for the auditor to use this data to estimate the total payroll costs for the period with a high degree of accuracy, thereby providing audit evidence for a significant item in the financial statements and reducing the need to perform tests of details on the payroll. The use of widely recognized trade ratios (such as profit margins for different types of retail entities) can often be used effectively in substantive analytical procedures to provide evidence to support the reasonableness of recorded amounts.</p> <p>A8. Different types of analytical procedures provide different levels of assurance. Analytical procedures involving, for example, the prediction of total rental income on a building divided into apartments, taking the rental rates, the number of apartments and vacancy rates into consideration, can provide persuasive evidence and may eliminate the need for further verification by means of tests of details, provided the elements are appropriately verified. In contrast, calculation and comparison of gross margin percentages as a means of confirming a revenue figure may provide less persuasive evidence, but may provide useful corroboration if used in combination with other audit procedures.</p> <p>A9. The determination of the suitability of particular substantive analytical procedures is influenced by the nature of the assertion and the auditor's assessment of the risk of material misstatement. For example, if controls over sales order processing are deficient, the auditor may place more reliance on tests of details rather than on substantive analytical procedures for assertions related to receivables.</p> | | <p>特定の分析的手続が適切かどうかは、監査人が実施する評価、すなわち、個別に、又は集計した場合に重要な虚偽表示となる可能性がある虚偽表示を発見するのに有効かどうかに関する評価に依存する。</p> <p>A7. ある場合においては、単純な計算手法であっても、分析的な手続として有効であることがある。例えば、年度を通じて、給与月額及び従業員数が明らかである場合、監査人はこのデータを利用して年度の給与合計を高い精度で見積もることができる。それによって、重要な財務諸表項目に対して監査証拠を入手し、給与に関して詳細テストを実施する必要性を低くすることがある。また、例えば、監査人が利用できると判断した一般に広く認知されている比率などの指標が存在する場合、計上された金額の一定の合理性を裏付ける証拠を入手するために、分析的実証手続にその比率を有効に利用することができる。</p> <p>A8. 分析的な手続の種類により入手する保証の水準は様々である。例えば、部屋当たりの平均賃料、部屋数及び空室率等の要素を考慮し、それらを適切に検討する場合には、建物に関する賃貸収入を見積もる分析的な手続によって、心証を形成するに足る証拠を入手することができ、詳細テストによる追加的な検討の必要性がなくなることがある。一方、売上高を確かめる手段としての売上総利益率の計算や比較のみでは、心証を形成するに足る監査証拠を入手できないことがあるが、その他の監査手続と組み合わせて利用する場合には、その他の手続により入手した監査証拠を補充することがある。</p> <p>A9. 特定の分析的実証手続が適切かどうかの判断は、アサーションの種類と、監査人の重要な虚偽表示リスクの評価によって影響を受ける。例えば、販売プロセスの一部の内部統制に不備がある場合、監査人は、売上に関連するアサーションに対して、分析的実証手続よりも詳細テストに依拠する程度を高めることがある。</p> | <p>の発生、会計方針の変更、虚偽の表示等が挙げられる。</p> |
| | <p>A10. Particular substantive analytical procedures may also be considered suitable when tests of details are performed on the same assertion. For example, when obtaining audit evidence regarding the valuation assertion for accounts receivable balances, the auditor may apply analytical procedures to an aging of customers' accounts in addition to performing tests of details on subsequent cash receipts to determine the collectability of the receivables.</p> <p>Considerations Specific to Public Sector Entities</p> <p>A11. The relationships between individual financial statement items traditionally considered in the audit of business entities may not always be relevant in the audit of governments or other non-business public sector entities; for example, in many public sector entities there may be little direct relationship between revenue and</p> | | <p>A10. また、詳細テストが同じアサーションに対して実施される場合に、特定の分析的実証手続が適切であることがある。例えば、売掛金勘定残高の評価に係るアサーションについて監査証拠を入手する場合、監査人は、売掛金の回収可能性を判断するために、貸借対照表日後の売掛金の回収に関する詳細テストに組み合わせて、取引先ごとの残高や回転日数の前期比較などの分析的な手続を実施することがある。</p> | |

| Clarity 版 ISA [Requirement etc] | [Application etc] | 報告書 [要求事項等] | [適用指針] | 主な現行の監査実務指針 |
|---------------------------------|--|-------------|--|--|
| | <p>expenditure. In addition, because expenditure on the acquisition of assets may not be capitalized, there may be no relationship between expenditures on, for example, inventories and fixed assets and the amount of those assets reported in the financial statements. Also, industry data or statistics for comparative purposes may not be available in the public sector. However, other relationships may be relevant, for example, variations in the cost per kilometer of road construction or the number of vehicles acquired compared with vehicles retired.</p> | | | |
| | <p><i>The Reliability of the Data</i> (Ref: Para. 5(b))</p> | | <p>《(2) データの信頼性》 (第4項(2)参照)</p> | <p>推定値の算出に利用するデータの入手の容易性及び信頼性</p> |
| | <p>A12. The reliability of data is influenced by its source and nature and is dependent on the circumstances under which it is obtained. Accordingly, the following are relevant when determining whether data is reliable for purposes of designing substantive analytical procedures:</p> <p>(a) Source of the information available. For example, information may be more reliable when it is obtained from independent sources outside the entity;⁴</p> <p>(b) Comparability of the information available. For example, broad industry data may need to be supplemented to be comparable to that of an entity that produces and sells specialized products;</p> <p>(c) Nature and relevance of the information available. For example, whether budgets have been established as results to be expected rather than as goals to be achieved; and</p> <p>(d) Controls over the preparation of the information that are designed to ensure its completeness, accuracy and validity. For example, controls over the preparation, review and maintenance of budgets.</p> <p>⁴ ISA 500, “Audit Evidence,” paragraph A31.</p> | | <p>A11. データの信頼性は、その情報源及び性質によって影響を受けるとともに、そのデータを入手する状況に依存する。したがって、分析的手続の実証手続の立案のために、データが信頼できるかどうかを判断する場合に検討する事項には以下が含まれる。</p> <p>(1) 利用可能な情報の情報源（例えば、情報は、企業外部の独立した情報源から入手される場合、より信頼できることがある。（監査基準委員会報告書 500「監査証拠」の A31 項参照））</p> <p>(2) 利用可能な情報の比較可能性（例えば、市場に関する一般的なデータは、特定領域の製品を生産して販売する企業のデータと比較できるようにするため、調整が必要となることがある。）</p> <p>(3) 利用可能な情報の性質及び目的適合性（例えば、予算が達成すべき目標ではなく予想される結果として策定されているかどうか。）</p> <p>(4) 網羅性、正確性及び正当性を確保するように整備された情報の作成に関する内部統制（例えば、予算の編成、実績との比較検討及び見直しについての内部統制）</p> | <p>16. 推定値の算出に利用するデータの入手が容易であり、推定値を算出できる場合は、分析的手続の実施が効率的であるが、データの入手が容易でない場合には、分析的手続の実施が効率的でないことが多い。</p> <p>17. 監査人は、推定値の算出に監査済み情報以外のデータを利用する場合、次の点を考慮して当該データの信頼性を評価しなければならない。</p> <p>(1) データを入手するシステムに係る内部統制の有効性</p> <p>(2) データの情報源の客観性及び独立性</p> |
| | <p>A13. The auditor may consider testing the operating effectiveness of controls, if any, over the entity’s preparation of information used by the auditor in performing substantive analytical procedures in response to assessed risks. When such controls are effective, the auditor generally has greater confidence in the reliability of the information and, therefore, in the results of analytical procedures. The operating effectiveness of controls over non-financial information may often be tested in conjunction with other tests of controls. For example, in establishing controls over the processing of sales invoices, an entity may include controls over the recording of unit sales. In these circumstances, the auditor may test the operating effectiveness of controls over the recording of unit sales in conjunction with tests of the operating effectiveness of controls over the processing of sales invoices. Alternatively, the auditor may consider whether the information was subjected to audit testing. ISA 500 (Redrafted) establishes requirements and provides guidance in determining the audit procedures to be performed on the information to be used for substantive analytical procedures.⁵</p> <p>⁵ ISA 500, paragraph 10.</p> | | <p>A12. 監査人は、評価したリスクに対応する分析的手続の実証手続を実施するに当たって、利用する情報の作成に関する内部統制があれば、当該内部統制の運用評価手続の実施を検討することがある。当該内部統制が有効である場合、一般的にその情報の信頼性は高くなり、監査人は、結果として分析的手続においてより強い心証を得ることができる。非財務情報に関する内部統制の運用状況の有効性の検討は、多くの場合、その他の運用評価手続と一緒にされる。例えば、企業は請求書発行に係る内部統制を販売数量の記録に係る内部統制と合わせて構築することがある。この場合、監査人は請求書発行に係る内部統制と一緒に販売数量の記録に係る内部統制の運用評価手続を行うことがある。また、監査人はその情報について既に監査手続を実施しているかどうかを確かめることがある。監査基準委員会報告書 500 は、分析的手続のために利用される情報について実施すべき監査手続の決定に関する要求事項と指針を提供している（監基報 500 第 9 項参照）。</p> | |

| Clarity 版 ISA [Requirement etc] | [Application etc] | 報告書 [要求事項等] | [適用指針] | 主な現行の監査実務指針 |
|---------------------------------|--|-------------|--|--|
| | <p>A14. The matters discussed in paragraphs A12(a)-A12(d) are relevant irrespective of whether the auditor performs substantive analytical procedures on the entity's period end financial statements, or at an interim date and plans to perform substantive analytical procedures for the remaining period. ISA 330 establishes requirements and provides guidance on substantive procedures performed at an interim date.⁶</p> <p>⁶ ISA 330, paragraphs 22-23.</p> | | <p>A13. 監査人が分析の実証手続を、企業の期末の財務諸表について実施する場合も、期中に実施し、さらに残余期間についても実施することを計画している場合も、A11 項(1)から A11 項(4)に記載されている事項を検討する。監査基準委員会報告書 330 は、期中に実施する実証手続についての要求事項と指針を提供している（監基報 330 第 21 項及び 22 項参照）。</p> | |
| | <p><i>Evaluation Whether the Expectation Is Sufficiently Precise</i> (Ref: Para. 5(c))</p> <p>A15. Matters relevant to the auditor's evaluation of whether the expectation can be developed sufficiently precisely to identify a misstatement that, when aggregated with other misstatements, may cause the financial statements to be materially misstated, include:</p> <ul style="list-style-type: none"> The accuracy with which the expected results of substantive analytical procedures can be predicted. For example, the auditor may expect greater consistency in comparing gross profit margins from one period to another than in comparing discretionary expenses, such as research or advertising. The degree to which information can be disaggregated. For example, substantive analytical procedures may be more effective when applied to financial information on individual sections of an operation or to financial statements of components of a diversified entity, than when applied to the financial statements of the entity as a whole. The availability of the information, both financial and non-financial. For example, the auditor may consider whether financial information, such as budgets or forecasts, and non-financial information, such as the number of units produced or sold, is available to design substantive analytical procedures. If the information is available, the auditor may also consider the reliability of the information as discussed in paragraphs A12-A13 above. | | <p>《(3) 推定が十分に高い精度であるかどうかについての評価》（第 4 項(3)参照）</p> <p>A14. 他の虚偽表示と集計した場合に重要な虚偽表示となることがある虚偽表示を識別するために、十分に高い精度で推定を行うことができるかどうかについての監査人の評価は、以下の事項を含む。</p> <ul style="list-style-type: none"> 分析の実証手続において推定する結果に関する予測の正確性（例えば、監査人は、研究開発費や広告宣伝費のような裁量により支出できる費用の比較よりも、売上総利益率の期間比較において、より高い一貫性を期待することがある。） 情報を細分化できる程度（例えば、分析の実証手続は、企業の財務諸表全体に適用するよりも、個別の事業部門に関する財務情報や多角的な企業の構成単位の財務諸表に適用する方がより効果的である場合がある。） 財務情報と非財務情報の両方の利用可能性（例えば、監査人は、予算や見込みなどの財務情報と、生産数量や販売数量などの非財務情報が、分析の実証手続を立案するために利用可能であるかどうかを考慮することがある。当該情報が利用可能である場合、監査人は、A11 項から A12 項において記載されているような情報の信頼性も検討することがある。） | <p>推定値の精度</p> <p>18. 推定値の精度とは、監査人により算出された推定値が正確な金額又は比率にどの程度近似しているかということである。推定値の精度が高い場合、推定値は正確な金額又は比率に近似している。このため、推定値と財務諸表項目の金額又は比率とに差異がある場合、当該差異は虚偽の表示である可能性が高いことを示すことになる。反対に、精度が低い場合には、差異をもって虚偽の表示の可能性があるかどうかを判断することが困難になる。監査人は、発見リスクの程度及び重要性の基準値に基づいて、推定値の精度を決定しなければならない。発見リスクの程度を引き下げるほど、また、重要性の基準値が小さいほど、より精度が高い推定値が必要となる。分析的手続のみを実施する場合には、分析的手続をそれ以外の実証手続との組合せによって実施する場合に比較して、相対的に精度が高い推定値を算出しなければならない。</p> |
| | <p><i>Amount of Difference of Recorded Amounts from Expected Values that Is Acceptable</i> (Ref: Para. 5(d))</p> | | <p>《(4) 計上された金額と推定値との許容可能な差異》（第 4 項(4)参照）</p> | |
| | <p>A16. The auditor's determination of the amount of difference from the expectation that can be accepted without further investigation is influenced by materiality⁷ and the consistency with the desired level of assurance, taking account of the possibility that a misstatement, individually or when aggregated with other misstatements, may cause the financial statements to be materially misstated. ISA 330 requires the auditor to obtain more persuasive audit evidence the higher the auditor's assessment of risk.⁸ Accordingly, as the assessed risk increases, the amount of difference considered acceptable without investigation decreases in order to achieve the desired level of persuasive evidence.⁹</p> <p>⁷ISA 320, "Materiality in Planning and Performing an Audit," paragraph A13. ⁸ ISA 330, paragraph 7(b).</p> | | <p>A15. 推定値との差異について、追加的な調査をせずに許容可能とするかどうかの監査人の判断は、個別に、又は他の虚偽表示と集計した場合に重要な虚偽表示となる可能性を考慮に入れて行われるが、重要性と手続から得ようとする保証水準によって影響を受ける（監査基準委員会報告書 320「監査の計画及び実施における重要性」の A10 項参照）。監査基準委員会報告書 330 は、評価した重要な虚偽表示リスクの程度が高いほど、より確かな心証が得られる監査証拠を入手するよう監査人に要求している（監基報 330 第 6 項(2)参照）。したがって、評価したリスクが高くなるのに応じて、確かな心証が得られる証拠を入手するため、調査をせずに許容可能と考えられる差異は減少する（監基報 330 の A18 項</p> | |

| Clarity 版 ISA [Requirement etc] | [Application etc] | 報告書 [要求事項等] | [適用指針] | 主な現行の監査実務指針 |
|---|--|--|---|---|
| | 9 ISA 330, paragraph A19. | | 参照)。 | |
| Analytical Procedures that Assist When Forming an Overall Conclusion | Analytical Procedures that Assist When Forming an Overall Conclusion (Ref: Para. 6) | 《2. 全般的な結論を形成するための分析的な手続》 | 《3. 全般的な結論を形成するための分析的な手続》 (第5項参照) | 監査の最終段階における財務諸表の総括的吟味に用いられる分析的な手続 |
| 6. The auditor shall design and perform analytical procedures near the end of the audit that assist the auditor when forming an overall conclusion as to whether the financial statements are consistent with the auditor's understanding of the entity. (Ref: Para. A17-A19) | A17. The conclusions drawn from the results of analytical procedures designed and performed in accordance with paragraph 6 are intended to corroborate conclusions formed during the audit of individual components or elements of the financial statements. This assists the auditor to draw reasonable conclusions on which to base the auditor's opinion. | 5. 監査人は、監査の最終段階において、企業に関する監査人の理解と財務諸表が整合していることについて全般的な結論を形成するために実施する分析的な手続を立案し、実施しなければならない。(A16項からA18項参照) | A16. 第5項に従って立案され実施された分析的な手続の結果から得られた結論は、財務諸表の個別の構成単位又は構成要素について監査中に形成された結論を裏付けることが意図されている。これは、監査人が意見表明の基礎となる結論を導くのに役立つ。 | 23. 監査の最終段階における財務諸表の総括的吟味に用いられる分析的な手続は、財務諸表の適否に関する監査人の意見表明に合理的な基礎を与えるに足る十分かつ適切な監査証拠を入手したかどうかについての監査人の検討に利用する。 |
| | A18. The results of such analytical procedures may identify a previously unrecognized risk of material misstatement. In such circumstances, ISA 315 requires the auditor to revise the auditor's assessment of the risks of material misstatement and modify the further planned audit procedures accordingly. ¹⁰ | | A17. 第5項に従って実施された分析的な手続の結果、これまで認識していなかった重要な虚偽表示リスクを識別することがある。このような状況において、監査基準委員会報告書 315は、監査人の重要な虚偽表示リスクの評価を修正し、これに応じて計画したリスク対応手続も修正するように監査人に要求している(監基報 315 第30項参照)。 | 25. 総括的吟味の結果、監査手続の追加が必要であると監査人が判断した場合は、監査手続を追加して実施する。 |
| | ¹⁰ ISA 315, paragraph 31. | | A18. 第5項に従って実施される分析的な手続は、リスク評価手続として利用される手続と同様である場合がある。 | |
| Investigating Results of Analytical Procedures | Investigating Results of Analytical Procedures (Ref: Para. 7) | 《3. 分析的な手続の結果の調査》 | 《4. 分析的な手続の結果の調査》 (第6項参照) | 重要な差異の調査及び評価 |
| 7. If analytical procedures performed in accordance with this ISA identify fluctuations or relationships that are inconsistent with other relevant information or that differ from expected values by a significant amount, the auditor shall investigate such differences by: (a) Inquiring of management and obtaining appropriate audit evidence relevant to management's responses; and (b) Performing other audit procedures as necessary in the circumstances. (Ref: Para. A20-A21) | A20. Audit evidence relevant to management's responses may be obtained by evaluating those responses taking into account the auditor's understanding of the entity and its environment, and with other audit evidence obtained during the course of the audit. | 6. 本報告書に基づき実施する分析的な手続により、他の関連情報と矛盾する、又は推定値と大きく乖離する変動若しくは関係が識別された場合、監査人は、以下を行うことにより当該矛盾又は乖離の理由を調査しなければならない。 (1) 経営者への質問及び経営者の回答に関する適切な監査証拠の入手 (2) 状況に応じて必要な他の監査手続の実施 (A19項からA20項参照) | A19. 経営者の回答に関連する監査証拠は、企業及び企業環境に関する監査人の理解を考慮に入れて、監査の過程で入手した他の監査証拠とともに、当該回答を評価することにより入手されることがある。 | 20. 監査人は、推定値と財務諸表項目の金額又は比率との重要な差異の調査を行うか否かについての基準値を設定しなければならない。この基準値は、他の勘定や取引における虚偽の表示の発生の可能性を考慮して、主として、重要性の基準値に基づくのが適切であるが、その際には勘定や取引ごとの重要性の値も考慮する必要がある。 |
| | A21. The need to perform other audit procedures may arise when, for example, management is unable to provide an explanation, or the explanation, together with the audit evidence obtained relevant to management's response, is not considered adequate. | | A20. 例えば、経営者が説明できない場合や経営者の回答に関連して入手した監査証拠と照らして経営者の説明が不適切と考えられる場合には、他の監査手続を実施する必要性が生じることがある。 | 21. 監査人は、推定値と財務諸表項目の金額又は比率との差異が重要であると判断した場合には、それが虚偽の表示によるものかどうかを調査するために次の手続を実施しなければならない。 (1) 推定値の算出に利用したデータ、手法等を再検討する。 (2) 質問を行い、関連書類の閲覧、証憑突合等の手続によって回答の合理性を確かめる。なお、その回答と監査人が入手している情報や実施した分析的な手続以外の実証手続により得られた監査証拠と首尾一貫している場合には、回答の合理性を確かめる手続を実施する必要がないこともある。 |
| Effective Date | | 《IV 適用》 | | |
| 2. This ISA is effective for audits of financial statements for periods beginning on or after December 15, 2009. | | 本報告書は、平成24年4月1日以後開始する事業年度に係る監査及び同日以後開始する中間会計期間に係る中間監査から適用する。 | | |
| | | 以上 | | |

"Copyright © [December, 2011] by the International Federation of Accountants (IFAC). All rights reserved. Used with permission of IFAC. Contact Permissions@ifac.org for permission to reproduce, store or transmit, or to make other similar uses of this document."